

鴻野伸夫さん(69)は稲敷市の国道125号線に架かる新古渡橋近くでまんじゅう屋を営んでいる。水郷地帯で生まれ、育った。東京に1年ほど住んだ以外は、霞ヶ浦の風のおいと水の輝きを見て今日まで過ごしてきた。仕事の余暇に始めた趣味のカメラ歴は約50年で、プロ並みの腕前だ。2002年6月に写真集「想い出の水郷」(常陽新聞新社)を出版して話題を呼び、写真展も各地で開催するとともに、講演会の演壇にも立った。写真集に収められた100点近くのモノクロ写真には貧しくも、しっかりと大地に根を下ろして生きてきた水郷の人々の暮らしぶりが活写されている。鴻野さんに、子供時代の想い出や人々の日々の営みなどを語ってもらった。

水郷の想い出 ①

語り・写真 鴻野 伸夫

母は、和菓子製造販売をやっていた鴻野まんじゅう屋に嫁いできたが、母の実家は店から五分ぐらいいと目と鼻の先というところもあり五、六歳の子供のころからよく遊びに行っていた。母の実家の家業は農業で米、野菜、養蚕などを幅広くやっていた。

近所の農家はどこの家も親類みたいなもので、子供たちも例外ではなくみんな友だちで、いろんなことをして遊んだ。隠れんぼや缶けり、魚と畑でとったイモなどの野菜が霜にやられないように入れておく貯蔵庫のようなもの、畑の中に穴を掘り、その上に三角のわら屋根を施し、柱もななく組み上げた簡単な造りだ。畳一枚ぐらいいの広さで高さが一呎ぐらいいから、子供の背丈なら十分な隠れ場となった。

イモ蔵はこんもりした古墳の後に横穴を掘ったところにもあり、そこも隠れんぼの格好の場所であった。横穴には、長さ一呎ぐらいいの直刀など無造作に捨てられていた。もちろん、さびてぼろぼろだったが、おもちゃジョウウ、ウナギ、ニホン日ナマズ、食用ガエルなど

の傾斜地に横穴を掘ったイモ蔵もあった。近くには造り酒屋やしよゆ倉もあり、子供たちには大人を盗んでひっそりした倉庫に隠り込み、高さが二呎もある大きな仕込みだるの中に入って隠れたりして遊んだりした。小川の水は澄んできれいだった。今のようになんクリートの用水路でなされる。問い合わせは、同支店(電話029・892・20)

イモ蔵の隠れんぼ

どこの家にも台所から流れ出た汚水を流す排水溝があり、そこに山から湧き出た水も流れ込んでいた。く自然掘りだから、水草や山のわき水などでも希釈されたりしていたので水質は良く魚はたくさんいた。

鴻野伸夫さんの「水郷の想い出」写真展が十五日から三十一日まで、常陽銀行江戸崎支店で開催

水郷の想い出 ②

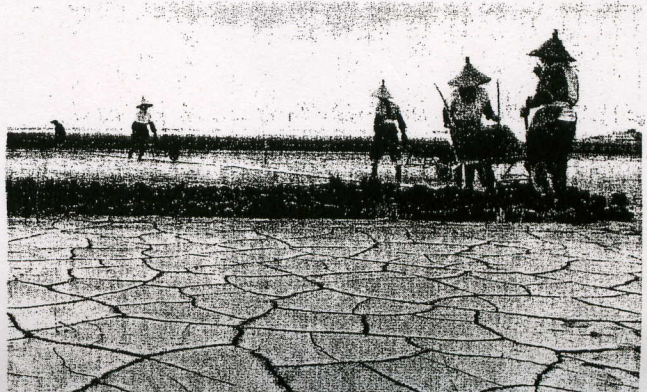
語り・写真 鴻野 伸夫

祖父に連れられて初めて川に遊びに行った。霞ヶ浦に注ぐ小野川河口の船の残材をそこらあたり

かだにはへりがないから、川に落ちても、水面と平らだから、すぐには上がれる構造で、安全安心だった。それにいかだは、波がきて水をかぶっても沈まない。夏休みは当然だが、学校から帰ったら、友だちと毎日川に行き遊んでいた。今この釣りは、いやとい

を食べて栄養分としているので、さおも篠竹を切ってきて作った。

釣り浮きも桐の木を削り、ろうを塗って、クレヨンで色を付けたものを使っていた。テグスと針だけは買った。作るのが楽しく、お互いに来来具合を自慢した。器用な奴がいるもので、いつもまねのできないような釣りが



「米づくりは土づくりから。昔の農耕すこと、土壌の改良に最大限の努力1965年以後、出稼が可能になり、力を入れるより現金収入に力を入れ、豪気、人情は少なくなり、金力のあるとされるようになり情けない社会になる説明は、土浦市在住で69年まで稲敷市を営んでいた半田彌太郎氏によるもので

四十五町岸と魚釣りのこと

水郷の想い出 ④

語り写真 鴻野 伸夫

小学校五、六年生のころになると遊びに知恵もつきだした。今でも作ってみると言われれば作れるほど鮮明に覚えているのは、手製の銃を作り、火薬を利用した弾も作り、鳥を撃って遊んだことだ。

年八月六日、当時としては大きな建物として目立った古渡村役場が戦闘機の機銃掃射を受け二人が死亡し、三人が負傷した。その日は、じりじりと

た。小さなバケツも網も捨てて母のところへ走った。母も私の名を呼びながら迎えに走ってきた。二人で山陰のコンクリート橋の下に逃げ込み、小さくなって震えていた。役場が攻撃され死亡した人もあったことを後で知り、震えが止まらなかった。魚とりをしていたのは役場から三百メートルいしか離れていなかった。

工夫をして、今では考えられない危険な道具を作らだしては、平気な顔をして遊んでいた。終戦近くになると、米軍の飛行機から銀色のテープが無数に落とされた。後で聞いたことだが、日本軍の電波通信を妨害するのが目的だったらしい。それを高学年の子が拾って来て見せびら

手製の鉄砲で狩猟

銃の材料は鉄パイプ一本と竹だった。弾は薬きょうを拾ってきて火薬を詰めて作った。薬きょうは、近所を歩き回れば簡単に拾い集めることができた。

焼きつくような太陽が照りつけ、暑い日だった。田草とりの母に連れられて田んぼに行き、近くの小川で魚とりをしていた。いつも遊んでいる場所なので、母から少し離れた、夢中で遊んでいた。頭上にキーンという音がすると、バリバリと何とも言えないごう音がし

神社掃除で枯れ葉を集めて燃していたら、不発弾が交じっていて、暴発して太ももにけがをした人もいたぐらいだ。

鉄砲作りは、空の薬きょうに火薬と弾を入れて紙を詰めるだけの簡単なもので、それをパイプに取り付け、真管には紙雷管を使い、くぎのようなものが雷管に当たるように工夫して発射した。お尻のところにボンと当たるようにガイドをつ

いか精度の高いのを作っていた。試射をすると、トタン板を抜くぐらいの威力があり、殺傷力は十分にあった。子供の知恵というものは、どうやって付いていくものか。銃作りなどは、誰に教わったという記憶はない。ただ、友だちと遊んでいるうちに、それなりの



水郷地帯特有の菅笠、日本手拭い、紺緋(がすり)のはんてんと田股引き、黒の手差し、紺の前掛けがユニフォームであった。男は菅笠が鍔広の麦わら帽子にかわるだけ。女性の前掛けの白いひもは既婚者。娘は赤いひもで色気を示した

一九四五(昭和二十)

水郷の想い出 ⑤

語り・写真 鴻野 伸夫

私が得意としていたのは「バッチメ」という方法でスズメをとることだ。仕掛けはこうだ。アミに弓を張り、鳥が餌を突付くとアミがバタンと倒れてかかるという単純なもので、餌は稲の穂などを使った。面白いようにかかったが、研究もした。弓の張り方、餌の落ち具合とか、子供なりの知恵を絞って工夫した。

「バッチメ」には、ホオジロとアオチがよくかかった。スズメは利口なのか、なかなか掛からなかった。この方法は空気銃で撃つように鳥に傷を付けないでとれたから買ってくる人もいた。近所にはホオジロを飼っているおじいさんがいて、持っていくと喜んで、ちょっとした小遣いをくれた。ホオジロは良かったが、アオチは鳴き声がよくないのか人気はなかった。

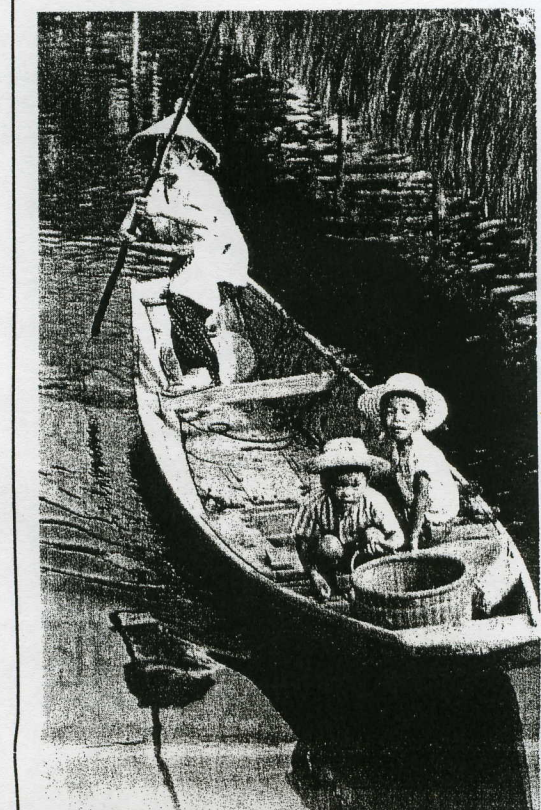
カスミ網も仕掛けたが、これは種類を問わずいろんな鳥がかかった。捕獲の最大の目的は小遣い稼ぎができるホオジロだった。そのため、ホオ

ジロの寄りそつな所にカスミ網を張るわけだから、当然のようにカスミ網にかかるのはホオジロが多かった。慣れてくるので山の開発が進み、ゴルフ場ができてから山菜と

野鳥と山菜とり

どにして食べた。毒キノコなどは、大人が見分けられたと思う。しかし、ゴルフブームで山の開発が進み、ゴルフ場ができてから山菜と

山菜とりは、ワラビとかキノコが多かった。家の周りにある山の状態は子供のころから歩き回ってよく知っていたから、どこにいつごろ行けば、何がとれるかというのを体で覚えていた。キノコはたくさん種類があった。とってきたキノコは家に持ち帰り、味噌汁な



「竿(さお)は三月(さんねん)、櫓(こ)は三月(みつぎ)」と言われ、竿で舟を漕ぐのはそれだけ難しかった。このおぼあちゃんも昔、嫁入りした時はこのような舟で送られてきたのだからか。

水郷の想い出 ⑥

語り・写真 鴻野 伸夫

夜になるとホタルとりだけでなく「ドジョウウブチ」という魚取りとりもやった。時期は、田植えが終わった五、六月ころで、苗の根が座り、田ん

が大量に発生し、松やにのにおいがする。そのすが顔に付着して「ドジョウウブチ」が終わるころには顔が真っ黒になっ

その三種の神器を持って、暗くて細いあせ道を歩くのだからバランスを取るの難しかった。弟で

「おつかぶせ」という魚取りもやった。これは底の抜けたザルかごを使用する。昔は堤防がなかったから大雨になると、霞ヶ浦の水が田んぼに逆流し、一緒に魚もぼってきた。そこで、田んぼの水が引くのを含図のよ



のやや斜めから打つとよくとれた。 □ 小野川沿いの古渡の商店街は、土浦市内と同じように浸水して被害を出していた。祖父の実家がその商店街で医院を開業し、川の淵に二階建ての家があった。台風の後、親は「片付けを手伝いに行ってくるよ」と言って出掛けたのを覚えている。 私は子供だったので連

崎支店で開催されています。問い合わせは、同支店(電話029・892・2012)まで。

水郷の想い出

水郷の想い出

水郷の想い出

水郷の想い出 ⑥

語り・写真 鴻野 伸夫

夜になるとホタルとりだけだなく「ドジョウブチ」という魚取りとりもやった。時期は、田植えが終った五、六月ころで、苗の根が座り、田んぼに少しの水を張った状態が最良とされた。

ドジョウブチの道具は、くしのように二十本ぐらい針を植えてあるドジョウ針とカンテラにバケツを持って夕方になる

田んぼで「ドジョウブチ」

仲の良い友だちと五、六人でつるんで行くことが多かった。明かりのカンテラはマツの根っこを燃料とした。これはさすがに大量に発生し、松やにのにおいがする。そのすが顔に付着して「ドジョウブチ」が終わるころには顔が真っ黒になっ

た。お互いの顔を見合わせて大笑いをするのが常だった。カーバイドが普及すると自然と松根油は使わなくなった。ドジョウの習性は夜になると動かないで浅い田んぼの中じっとして眠っている。それを見つけてはド

も入ればバケツぐらいは持ってもらったが、ほとんど一人でやった。大人もやっていたが、子供でも一晩でバケツ半分ぐらいはとれた。ドジョウブチのコツは、ドジョウ針を真上から打つのではなく、眠っているドジョウのやや斜めから打つこととれた。

「おっかぶせ」という魚取りもやった。これは底の抜けたザルかごを使用する。昔は堤防がなかったから大雨になると、霞ヶ浦の水が田んぼに逆流し、一緒に魚ももってきた。そこで、田んぼの水が引くのを合図のよ

私の子供だったので連



水郷の想い出 ⑦

語り・写真 鴻野 伸夫

もななく、泳ぎは自然と覚えていた。

一番面白かったのは、素潜りでいかに長く水中を泳ぐことができるかと

注意されればされるほど好奇心を持つものだ。二艘までは大丈夫だが三艘となると勇気がいった。

い。松林の中では、兵隊さんが上半身裸で寝転がって休んでいた。馬が草を食んでいた。のどかな光景だった。

夕方近くになると、水でも耳に残っている。

馬演習を終えた兵隊さんが馬に乗り、隊列を組んで砂利道を踏みながら帰る時のひずめの音が、今

人気のあった湖水浴場

家から、湖水浴場で一、二、堂崎の鼻の湖水浴場

電話 029・8992

ケツを持って夕方になる
と出掛けた。

仲の良い友だちと五、
六人でつるんで行くこと
が多かった。明かりのカ
ンテラはマツの根っこを
燃料とした。これははず

及すると自然と松根油は
使わなくなった。ドジョ
ウの習性は夜になると動
かないで浅い田んぼの中
でじっとして眠ってい
る。それを見つけてはド

もやっていたが、子供で
も一晩でバケツ半分ぐら
いはとれた。ドジョウブ
チのコツは、ドジョウ針
を真上から打つのではな
く、眠っているドジョウ

変だった。
台風といえば、私の家
は高台にあるため水に浸
かることはなかったが、
後ろの山が崩れることが

二階まで浸水してると
聞いて、二階から魚を釣
ったら面白いだろうとな
思った。
鴻野伸夫さんの「水郷
の想い出」写真展が三十
一日まで、常陽銀行江戸

稲刈り機が普及しても長雨や台風で水がたまると、
かまで刈るより仕方がなかった。また、刈り
入れ時に強い雨や台風が来ると稲は倒伏し、この
時も機械は使えなかった。手刈りの場合、なまじ
ぬかるんでいるより、たっぷり水があつた方がい
い。稲や穂先が泥で汚れないからだ



水郷の想い出

語り・写真 鴻野 伸夫

もなく、泳ぎは自然と覚
えていた。
一番面白かったのは、
素潜りでいかに長く水中
を泳ぐことができるかと

注意されればされるほど
好奇心を持つものだ。二
艘までは大丈夫だが三艘
となると勇気がいった。

い。松林の中では、兵隊
さんが上半身裸で寝転が
って休んでいたたり、馬が
草を食んでいたたり、のど
かな光景だった。

夕方近くになると、水
でも耳に残っている。
馬演習を終えた兵隊さん
が馬に乗り、隊列を組ん
で砂利道を踏みながら帰
る時のひずめの音が、今

鴻野伸夫さんの「水郷
の想い出」写真展が三十
一日まで、常陽銀行江戸
崎支店で開催されていま
す。問い合わせは同支店
(電話029・892・
2012)まで。

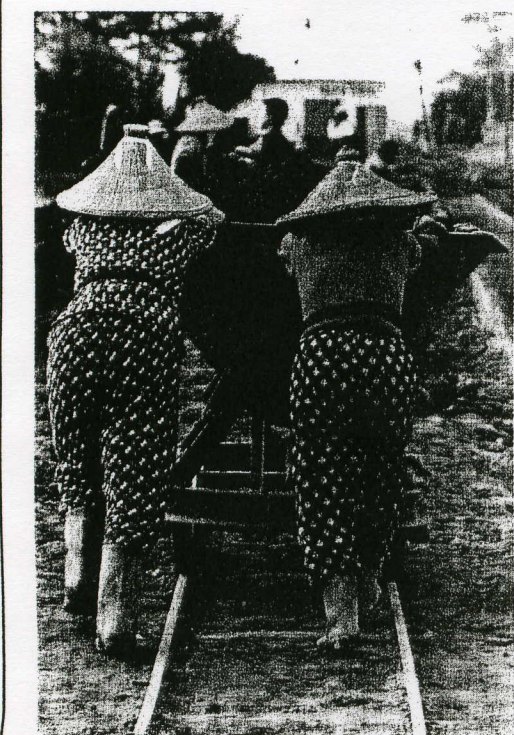
人気のあつた湖水浴場

家から、湖水浴場で一
番近いのは古渡の橋が小
野川と霞ヶ浦の境目にな
る、霞ヶ浦に入る河口に
あつた堂崎の鼻だった。
家から子供の足でも七、
八分の距離にあつた。湖
水浴場は堤防もなく、二
百メートル沖まで遠浅で
の砂浜が広がり、背後に
は松林が広がっていた。

ら、堂崎の鼻の湖水浴場
は学校の水泳教室にも使
われていた。遠浅といっ
ても、場所によっては大
人でも立えないほどの深
い所もあつたが、ほとん
どは大人の胸ぐらいいで
一、五十メートルだった。
麻生の湖水浴場によく似
ていた。

いう競争だった。岸辺に
係留しているサツパ船の
下を何艘(そう)まで潜
れるかというものだ。潜
っている途中に苦しくな
り浮き上がって船の下に
ぶつかると、体が船底に
くっついて離れない。そ
したら浮き上がれずに死
んでしまうという大変危
険な遊びだった。

堂崎の鼻では、騎馬隊
の水馬演習が行われてい
た。三、四歳のころ、祖
父の手を握りしめながら
見ていたことをよく思い
出す。はっきりしない
が、千葉に駐在してい
た陸軍が、水の中で馬を扱
う訓練で、水しぶきをあ
げ馬が跳ねていたよつな
記憶がある。千葉には御
陵牧場もあり馬の産地で
連隊もあつたから演習に
来ていたのかも知れな



地元の土地改良区(ほ場整備)事業が盛んになると、農家の主婦もわら編みなどの分の悪い副業は止めて、競って作業現場に出て働くようになった

プールのない時代だか

供たちは、誰に習うこと

大人からは「それだけ
はやるな」と言われてい

たが、子供の冒険心は、